

下に敷く莞筵粉純を三重にすることで、纁席畫純は加席であつて、この席の重數に關係はない。然るに熊氏は郊特牲の孔疏に引いてある所に依ると「席之重數、異於棺也、三重止三席也」といつてゐるが、それならばこの二種の席で三重であることを如何に説明しようとするのか。殊に前述の禮器の孔疏によれば、熊氏の説を引いて「熊氏云二重則三席也」とある。もし孔疏に誤がないとすれば、熊氏の説は前後撞着した議論で據るに足らぬものである。

以上論じた所によつて、天子の席五重も同様に下に敷く莞筵粉純が五重であつて、その上に纁席畫純と次席黼純との二種の加席を加へることになる。以下四重、三重、二重、一重も皆これと同様に重數を數へ、加席の數は二種の時も一種の時もあり、又加席は無い時もあるが、席の重數には變化はない。従つて席は加席を含めると天子の時は五重七席となり、諸侯の時は三重四席、大夫は再重三席、士は一重二席となつて、之を五重五席、三重三席、二重二席、一重一席と考へるものは誤である。

(終)

易 字 攷

小 嶋 政 雄

易が書物の名であることは先人が既に幾度か述べてゐる所で争はれぬ事實である。然らば其の命名の理由如何といふことになると必ずしも判明してゐない。で専ら説文をあさつて色々考へてみた報告が本

文である。

易緯乾鑿度には

易一名而含三義、所謂易也、變易也、不易也、周易正義序所引。古經解彙函輯錄の易緯乾鑿度には、孔子曰、易者易也、變易也、不易也、とある。

此の説は既に鄭玄が其の易贊漢魏二十一家易注 鄭康成易注卷頭に於ての説明でも想像せらるゝ如く繫辭傳中の文を要約して得たものと思はれる。易贊に曰く

易之爲名也、一言而函三義、簡易一也、變易二也、不易三也、故繫辭云、乾坤其易之緼邪、又曰易之門戶邪、又曰夫乾確然示人易矣、夫坤隤然示人簡矣、易則易知、簡則易從、此言其易簡之法則也、又曰其爲道也婁遷、變動不居、周流六虛、上下无常、剛柔相易、不可爲典要、唯變所適、此言從時變易出入移動者也、又曰天尊地卑、乾坤定矣、卑高以陳、貴賤位矣、動靜有常、剛柔斷矣、此言張設布列不易者也、

此の説は恐らく緯書の注を書いた鄭玄が乾鑿度の説を繼承敷衍したものであるがそれは兎に角として乾鑿度の説の繫辭傳に源を得てゐることを證するものと言ひ得よう。易緯及易贊の説は餘程妙を得てゐたと見えて漢以後の易學者にもこれに賛するものが可なり多かつたらしく今玉函山房輯佚書中に僅かに存する諸家の説を見るに南齊の劉瓛は

易者謂生々之德、有易簡之義、不易者、言天地定位不可相易、變易者、謂生々之道變而相續、皆以緯稱不煩不擾澹泊不失、此明是易簡之義、無爲之道、周易劉氏義疏、

といひ、又陳の周宏正は

易者易也、不易也、變易也、易者易代之名、凡有无相代、彼此相易、皆是易義、不易者常體之名、有常有體、

无常无體、是不易之義、變易者相變改之名、兩有相變、此爲變易、周易周氏義疏

といつてゐる。其の外隋の崔觀撰周易崔氏注にも劉瓛と同説が出てゐることは周易正義序の語る所によつて明かである。即ち此等は何れも易緯及易贊の忠實なる傳承者といひ得よう。翻つて此等所論の祖とも稱すべき乾鑿度の説を検討するのであるが前號でも一言觸れた如く易に易簡變易の義と共に變易とは兩立すべからざる矛盾概念不易の義を包含してゐるとするのはあまりにも論理を無視した附會的説明である。乾鑿度には更に筆を進めて

易者其德也、光明四通、簡易立節、天以爛明、日月星辰、布設張列、通精無門、藏神無穴、不煩不擾、澹泊不失、此其易也、變易者其氣也、天地不變不能通氣、五行迭終、四時更廢、君臣取象、變節相移、能消者息、必專者敗、此其變易也、不易者其位也、天在上、地在下、君南面、臣北面、父坐子伏、此其不易也、正義序所

引に據る。

其の文勢より考へ又鄭玄の注する所より考へるも更に周易正義序の述ぶる所よりするもこれは書名の説明といふよりは寧ろ純然たる哲學觀といふべきであらう。即ち易簡の説は宇宙の本體の屬性に關する敘述であり、變易不易の説は宇宙の現象界の敘述、詳言すれば天地自然の法則人倫の規範に關する敘述である。而してかゝる哲學的思想體系を直ちに移して易の書名に附會しようと試みるから易には不易の義も含んでゐるといふ様な矛盾が出来て來るのである。蓋し易と不易とは文字が與へる視覚上の類似があるから此のことも亦與つて敘上の矛盾した命題を作り上げる原因となつたのであらう。孔隸達は此の矛盾を氣附いたと見えて變易易簡の義に就いては夫々

夫易者變化之總名、改換之殊稱、自天地開闢、陰陽運行、寒暑迭來、日月更出、宇萌庶類、亭毒羣品、新々不停、生々相總、莫非資變化之力、換代之功、中略謂之爲易、取變化之義云々、正義序今之所用、同鄭康成等、

易者易也、音爲難易之音、義爲簡易之義云々同斷

と論じてゐるけれども不易の義に就いては明確な主張をしてゐない

陳の張謏・隋の何妥の講疏には易者換代之名、待奪之義とのみ論じてゐるやうであるがこれは他

の説が残缺したのかも知れないから暫く措くことにする。

更に宋に至り程子は不易・易簡の義を淘汰し變易の一義としてゐる。

易變易也、隨時變易、以從道也、周易程子傳序、

朱子も亦其の本義に

易書名也、其卦本伏羲所畫、有交易變易之義、故謂之易、卷一

といつてゐる。明の薛瑄の讀書錄に

易有變易交易兩儀、變易之易、陰陽晝夜流行是也、交易之易、天地上下四方對峙是也、集注頭註所引、

とあり、これは朱子の説を敷衍したのであるが要するに流行交錯の意でやはり變化の二様相と思はれる。諸橋先生も交易は陰陽の對待、空間的變化なり、變易は陰陽の流行、時間的變化なりと申されたが確に卓見であると思はれる。易意參疑によれば愚按易之三義註疏紛々、至朱子本義云有交易變易之義故謂之易、而其義始定、集注頭註所引、とあれば朱子によつてはじめて易の意義は確定されたわけである。かくして交易變易二義は宇宙間の現象を説明し餘蘊なしとするも直ちに以て書名の解釋をなしたつたとするのは早計である。然るに上述の諸説は皆以て能事終れりと考へてゐるやうである。これは何

故であらうか。此處で思ひ出されるのは作易起源の傳說的信仰である。

古者包犧氏之王天下也、仰則觀象於天、俯則觀法於地、觀鳥獸之文與地之宜、近取諸身、遠取諸物、於是始作八卦、以通神明之德、以類萬物之情云々繫辭下、禮記祭義にも同様の記事見ゆ。

即ち易は支那文化の黎明期に於て太古の聖人包犧氏が天地自然の大法則に準じて製作したもので宇宙間の現象と易とは密接不離な關係を有してゐると信じられてゐることである。此の信仰的觀念を媒介としてはじめて宇宙現象の説明即易の説明と考へられるので當時の人はこれ以上改めて書名の説明を要しなかつたのであらう。朱子は易學啓蒙に於て所謂七考占なるものを述べて居り占筮の法は老陰老陽相變ずる原理が根本をなしてゐることを例證したから易の名は變易の意なりとの説はこの旁證によつて益々有力となつたのであらう。私は嘗て包犧畫卦説が戰國時代の末期から漸次釀成され漢代に入り繫辭傳によつて始めて記録されたもので、其の要素は宗教的、神話的であり其のまゝ直ちに合理主義的立論の根據となすことは不可能であることを論じた。吾々はこの神韻漂渺たる傳説に絶縁し、新に自由な立場から易の經文を眺めるとき、易が特に天地自然の大理法に準據して作られたものだといふ理由を發見するに苦しむのである。虚心に觀察すれば經文自身の語る所は支那上代人の素朴な社會生活の赤ラ、な斷片にすぎない。郭沫若氏は其の著中國古代社會研究中の周易的時代背景與精神生産に於いて具にこの事を論じてゐる。象象傳以下の十翼には勿論堂々たる哲學が記されてゐる。然し十翼は自らこれ十翼で原始的形態の易には附加されてゐないことは汲冢出土の易が經文上下二篇に止まることによつても想像される。且つ經文に附加されてある六十四卦や數のに關する思想も餘り古いものとは考へられない。何とな

れば卦の基本觀念たる陰陽思想の發達も戰國時代末期からであり七八九六の數は繫辭傳の筮法を外にしては考へられないものであるからである。こゝに於て易を變易交易即ち宇宙現象の根本法則の意を寓するものとか老陰老陽相變化する意を寓すると説く解釋は甚だ根據あやしきものとなつて來るのである。

抑、易はもと占筮の書であつて其の儒教の經典としての位置を克ち得たのは文獻の示す所によれば漢以後らしい。しかも六經の主位に置かれて愈ゝ重要視せられるに至つたのは後漢の漢書藝文志以後である。占筮は云ふ間でもなく知り得べからざる未來の事象に就いて神祕的呪術的な方法により神明に幽參し其の啓示を得て之を豫測するものであるから一種の宗教的基礎の上に成立發達したものであることは爭はれない。従つて易の名稱に就いての檢討にはかくの如く單に其の字義の上にのみ徒らな憶測をはせるよりは寧ろ進んで歴史的發生的或は言語學的の考察を加へねばならぬと思ふ。かかる意味に於ける研究の第一歩として私は先づ易字の小學的意義を追究検討しいさゝか私見を加へようと思ふ。

先づ説文によるに

易蜥易蜥蜴守宮也、象形、祕書說日月爲易、象陰陽也、一曰从勿云云易之部
段注によれば

虫部蜥下曰、蜥易也、蜥下曰、在壁曰蜥蜴、在艸曰蜥易、

釋魚曰、榮蜥蜴、蜥蜴蜥蜴、蜥蜴守宮也、郭云轉相解、博異語、別四名也、
とあり、爾雅釋魚の疏を見れば

蜥蜴蜥蜴蜥蜴守宮一物、形狀相類而四名也、


といひ更に説文・方言・漢書東方策傳等の記事を歸納して

案此諸文則是在草澤中者、名蟻蜥蜴、在壁者名蜥蜴守宮也、

と結論し説文蜥蜴下の文と大體同様の意を表はしてゐるが私は寧ろ易は蜥蜴であり、蜥蜴はトカゲ・ヤモリ等の上位概念即ち其等の総稱とする説文解字部首訂（今人饒炯撰）の説が明快であると思ふ。曰く

象形一曰指事、炳案蜥蜴一物、而在壁在艸及大小之異、許於蜥下分別言之、於易下統括言之、殆以互文見義、欲人知其對言有別、而散言無分也、篆象頭與四足之形、（説文詁林による。）

即ち易は蜥蜴の象形


易即蜥之本字、鐘鼎文作、乃古象形文、易四足鋪張、此象其側視形也、説文解字注箋（清徐灝撰）

とする説が妥當と思ふ。次に祕書の説は分明であるが一日从勿云々は少々附言を必要とする。即ちこれは正しくは从日勿といふべきで説文句讀（清王筠撰）に

不言従日者 承上文也、説文詁林による。

といひ其の省文あることを説明してゐる。

以上の吟味により説文による易字の發生的或は構成的説明は三種の説があることになる。即ち蜥蜴の象形とするもの、日月の會意とするもの、及び日勿の會意とするものである。

易が蜥蜴の象形であるといふ説に對してはが何故に特に蜥蜴の象形と特定し得るか、又易字が先秦時代の文獻には蜥蜴の意義に用ひられたる例なく却つて象形説よりすれば派生的意義或は一步進化した概念と見るべき變易難易之易の義に用ひられる理由如何等幾多の疑問が續出して來る。日月を易となす

といふ説は段注に

按參同契曰、日月爲易、剛柔相當、陸氏德明引虞翻注云、字从日下月、

とあり周易參同契の説に基づくものである。參同契曰く

天地者乾坤之象、設位者、列陰陽、配合之位、易謂坎離、坎離者乾坤二用、

坎戊月精、離己者日光、日月爲易、剛柔相當、

日月説の源はここに存するものである。而して參同契の説は學者多く孟喜の卦氣消息の説より來るものと論じてゐる。孟喜は卦氣直日の圖を作つて卦氣の消息即ち陰陽消長の運を説明した。日月説の遡源は煩しければこれで止めるが此の説にも難點疑問なきわけには行かない。易謂坎離とは參同契の論ずる處で繫辭傳等によれば乾坤其易之緼邪、乾坤成列、而易立乎其中矣、乾坤毀則无以見易、易不可見、乾坤或幾乎息矣、繫辭上とか乾坤其易之門邪、乾陽物也、坤陰物也、陰陽合德、而剛柔有體云々繫辭下等とあり未だ嘗て坎離を以て易を言ふことがない。蓋しこれは孟喜易で坎離震兌を四正卦とし四方に配し他の六十卦の首班に立ててゐることから源を得て其の後に起つた説であると思はれる。かく易の説明に後世思想を以て附會することは吾人のとらざる所である。尙文字の構成的説明より見るも日月を易となせば同じ日月の合成なる明は何故に易と爲らざるかこれ亦疑問と言ふべきである。然れども此の點に就いては學者が未だ十分に論及してゐない。

日と勿との説に就いては更に學者の論ずる所が詳を缺いてゐる。段注には簡單に

又一説从旗勿之勿、皆字形之別説也、

とあり、說文解字部首訂には

其一曰从勿者、又爲簡易、本字从勿易省聲、勿州里所建旗、以趣民者取其簡便、从之、說文詁林所引

とあれど分明でない。恐らくは說文勿部の說と照應する爲に行はれたものでやゝ無理な解釋でないかと思はれる。又簡単に難易（簡易）之易の意に用ふるは假借であるといふ説易善變、因爲凡物變易之稱、又引申爲難易之易云々、說文解字注箋もあるが其の假借となす思想的經路が不徹底である。

以上は易字に關する三説に就いて再考を要すべき點を二三指摘したのであるがこれを徹底的に解決するには尙多くの時日を要し更に引いては說文學の態度とも決別せねばならぬことゝなる。今は只說文の示す三説によつて上代易の字が何如なる意味に使用されたかを知つて満足しなくてはならない。

蜥蜴象形説の主張を聞くに

陸佃埤雅曰、蜥善變、周易之名、蓋取乎此、李時珍本草綱目曰、蜥即守宮之類、俗名十二時蟲、嶺南異物志言、其首從十二時變色、蓋物之善變者、莫若是、故易之爲書、有取焉云々說文解字注箋

後世羅泌楊慎等更に之を敷衍して奇説を出してゐる。要するに易を變易の意とするのである。

日月説は卦氣消息の説に基き天に懸る陰陽の代表的なるもの即ち日月を以て其の消長變化を象徴せしめるものであるからこれ亦變易の意に取るものと解することが出来る。

从日勿の説は不徹底ながら前述の如く難易之易或は簡易の意と見るべきであらう。

近時我が高田忠周先生は易を龍の古名とする説學古變凡未見をとへらるゝことが兼坂晉氏の易學概觀に見えるが其の説は略、說文の蜥蜴象形説に類似してゐるやうであるから此に論じない。又藤村與六氏著、易

の新研究」によれば更に易字に關する別説を掲げてゐる。次にその一部を引文すれば『最近に葛城學蒼氏は新説を有つて居り、爲に易字攷一篇を作つた。氏曰く「易(彤ニ同ジ)、古イトコロニテハ、邇沙ナドモアツテ必ズシモ暢ノ象形デハナイ。コレハ月ト勿ノ二字ノ合文デ勿ハ光線ダカラ、易ハ月ノ光線ヲ意味スル象形デアル云々(中略)」と。詳しくは易字攷を見ればわかるが、此説は易の本義にも叶つて大に面白いと思ふ云々』易の新研究 三五―三六といつて葛城氏の説を推稱してゐる。陰陽が變化推移する思想は恐らくは月光の盈虚或は四時の變化等より類推發達したものであらうからこの月光説によるも結局變易といふ概念に到達することが出來ると思ふ。以上易字の意義を討究したのであるが結局變易易簡の二義に歸着するといふことになる。而して説文通訓定聲易部の舉例に徴すれば少數の特例は暫く措き先秦漢初の文獻に表はれた易字の用例もやはり變易易簡の意であつて此の點説文學者と軌を一にすることになる。

私は先に朱子の易説に嫌らず新生面を見出さんとして先づ説文による字義の検討に入つたのであつた。然るに字義よりすれば再び易緯の説或は少くとも正義及び朱子の説に堂々廻りして來たのである。只こゝに一つ易字に就いて特異の説明をなしてゐるものが目についたのである。それは章炳麟撰小學答問の説であつて今左に之を引文すれば

問曰、説文易蜥易、周易之誼所取云何、鄭君贊易曰、易之爲名一言而函三誼、簡易一也、變易二也、不易三也、此似依聲爲訓、非其本誼、答曰、易藉爲蜺、説文蜺能齋肅事神明者、在男爲蜺、在女爲巫、唐均音胡狄切、與易聲最近、卜筮本掌千巫、故筮字从古文巫、筮官巫更巫咸巫式巫目巫易巫比巫祠巫參巫環、卽以巫爲筮字、祭義昔者聖人建陰陽天地之情以爲易、易拘龜南面、鄭君曰、易官名、周禮曰、大卜、是卽卜筮之官

稱、易乃卽覡字、孫卿子王制云、僞巫跛擊、又以擊爲覡、皆聲相似云々 說文詁林所引

五六

といふのである。卽ち易を以て覡の意となしたので面白い解釋だと思ふのである。覡に對する說文の解釋は國語楚語に出てゐる觀射父の昭王に對へた言を採用したものといはれる。占筮がもと巫の掌る所であつたといふ事は決して唐突の説明でなく筮字の構造を見ても思半ばに過ぎるものがある。呂氏春秋分審覽勿躬篇に巫彭作醫、巫咸作筮、といふ文句もある。又論語に子曰、南人有言、曰、人而無恒、不可以作巫醫、善夫、子路篇といふ文がある。易の恒卦九三の爻辭と等しいので易と論語の關係を考へる時間問題になる處であるが、それはさて措きこれを禮記の子曰、南人有言、曰、人而無恒、不可以爲卜筮、古之遺言與云々緇衣篇といふ文と比較すると、前者に巫醫となつてゐる所が後者では卜筮となつてゐる。これも巫と筮とが密接な關係に在ることを暗示してゐるものである。尙更に進んで言へば小學答問の引文中にある如く周禮春官大司馬伯筮人の九筮の條には第五に巫易といふ名が出てゐる。鄭注によると巫は筮字の誤として説明が甚だ不自然であるが孫詒讓の正義によれば巫易は巫易の誤で楚辭招魂に見える巫陽であると論じてゐる。易を易の誤であると簡單に斷ずることは如何であらうか。尤も正義の説は獨斷ではなく宋の劉敞の七經小傳等にも既に存する所であるといふが私は寧ろ巫覡と易との密接なりし上代の關係が文獻に纔に遺つた貴重な資料でないかと私かに考へてゐる。巫なるものが神靈の憑依を受け、神人の間に立ち人の將來を豫言し凶を避け吉を受ける方法を教へるやうな社會的地位にあつた事は決して考へられない事ではない。而してかゝる推測は左傳の記事によつても可能であると思ふ。左傳には多くの占筮記事が出てゐるがそれには大抵史が關係してゐる。史も亦巫と密接な關係を持つて居るもので上代

は兩者同じやうな事を掌つてゐたらしい。周禮春官大宗伯の部に占人筮人男巫女巫巫大史小史等が類似の官職として一團のもとに擧げられてゐるのでも分る。

要するに易は魂なりといふ小學答門の説は行詰つた私の易の書名の解釋に一道の光明を與へ豊富な想像の世界を恵んで呉れる。小學答門の説は勿論嚴正な吟味を加へらるべきものであるが將來かゝる解釋の方面に研究の歩を進めて行つたなら案外大きな收穫が得られるかも知れない。そして易の歴史的起源をより合理的に説明し得べき幾多の材料を發掘するかも知れない。今は只その報告をするに止めて置く。

我國の律令に及ぼしたる支那文化の影響

目次 (概略)

市川 本太郎

序 論

第一章 研究方法に就いて

第二章 律令の意義と日支兩律令の關係

第三章 參考資料に就いて

本 論

第一篇 道 德 (日本律令中の道德に及ぼしたる支那文化の影響)

第一章 對己的道德

第二章 家族的道德

第三章 社會的道德

第四章 國家的道德

第五章 結 論

第二篇 政 治 (日本律令中の政治に及ぼしたる支那文化の影響)

第一章 行政組織

第二章 戶 籍